

京都大学	博士(文学)	氏名	佐 野 光 宜
論文題目	古代ローマ社会の結節点 ― コレギアと見世物を通じた社会史的研究		
(論文内容の要旨) 本論文は、古代ローマ帝国の社会について、最盛期の広大な帝国に暮らす人々の社会的結合関係を論じようとしたものである。紀元前1世紀から後3世紀にかけての最盛期における、ローマ帝国西部の都市社会の社会的結合関係を明らかにして、ローマ社会の特質を解き明かすことを論者は目指している。問題の所在と研究史を論じた序論に続く本論は2部に分かたれ、第Ⅰ部は2章、第Ⅱ部は5章から成り、第Ⅱ部には補論が1編付されている。 序論に拠れば、本論文のとる研究視角は、人と人との結びあうさま、あるいは紐帯を通してその社会を考察しようというもので、ソシアビリテ（社会的結合関係）論と呼ばれるものであるが、ローマ史研究における「社会史」研究の隆盛からは取り残されるように、ソシアビリテをめぐる議論はほとんどなされていないと論者はいう。そして、ソシアビリテを分析するための素材として議論に十分な史料は残されていると指摘する。さらに、ソシアビリテを議論する際に、人々の間の2つの関係性を見る必要があり、その一つが概ね同程度の社会階層内で結ばれる水平的な社会的結合関係で、いま一つが異なる社会階層間で結ばれる垂直的な社会的結合関係であるとする。論者は、前者の関係性をつなぐものとして、組合やクラブのような存在で自発的に形成されるコレギアを、後者の関係性を分析する対象として、異なる社会層が一つの場所に集まる見世物、とくに剣闘士競技を、それぞれ好適な素材とみなして分析する。 本論の第Ⅰ部では、コレギアを分析している。論者は、コレギアについての研究史を整理し、その問題点を指摘した上で、コレギアによる葬送活動に注目し、関連する碑文史料を網羅的に検討した。その結果、まずコレギアの構成員となった人々の出自とは、(α) 東方出身者、(β) 出身地は判断できないが解放奴隷、あるいは近い直系において奴隷であった人々、のいずれかに当てはまる者が70%近くを占めていたことが判明した。階層としては、騎士身分以上の地位にある人物はほとんど確認できず、職業を紐帯としているコレギアの事例が多いこと、また入会金や会費、構成員の死に際しての供出金が求められたコレギアも存在したことから考えて、都市の中・下層民、ただし無産市民ではない人々と考えられる。都市の一般民衆の場合、その約80%は家族によって墓碑が建てられているが、コレギアの構成員たちの墓碑にはほとんど家族の名が記されていない。このことは、彼らが東方からの移住や奴隷身分からの解放によって拠り所とすべき基本的帰属対象を喪失していた、すなわち家族や親族を有さなかったということを意味しているのではないかと考えられる。以上のように論者は調			

査結果を受けとめた上で、かかる人々がコレギアに集い、家族によって果たされるべき葬送を執り行い本来家族や親族の絆を温めるべき祝祭を、彼らは仲間同士で祝ったと見る。要するに、家族を有さない人々がコレギアという社会集団を構成することによって、擬制的な家族関係を取り結ぶ場を獲得したと論者は考えるのである。

次に、第Ⅱ部では剣闘士競技・円形闘技場を分析している。ローマ人の社会生活において見世物の占める比重は大きかったが、なかでも民衆に最も人気のあった剣闘士競技は、研究史上でも早くから関心を引き19世紀以来多くの研究が蓄積されてきた。その初期に形成された学説は長らく継承されてきたが、1960年代に「社会史」の視座から研究されるにいたって、剣闘士競技・円形闘技場研究は転換を迎える。論者はこのように研究史を捉えた上で、なお解消されない問題点があることを指摘する。それは、コロッセウム中心、ローマ市中心に剣闘士競技・円形闘技場を分析して得られた知見を、そのままローマ社会全体・属州社会全体に敷衍して議論するという傾向である。それゆえ、論者はイタリア地方都市や属州都市の一つ一つに密着した事例研究から、改めて剣闘士競技と円形闘技場が有した意味を考察するという方針をとる。具体的には4つの事例を検討する。

論者が最初に検討した事例は、ポンペイにおける剣闘士競技である。イタリア内の事例としてポンペイを取り上げた理由は、他に抜きん出て豊富な史料を有するだけではなく、現在確認されている円形闘技場としては同市のものが最初期に属することから、ローマ市中心、コロッセウム中心の見方によらない考察ができるのではないかと考えられるためである。論者が先行研究を概観してとくに注目したのは、帝国中央政府と地方の剣闘士競技の関係について議論が分かれていることである。そして、関連史料を精査し、以下の点を明らかにした。まず、競技の開催が他都市との交流をもたらすと同時に、自都市の権威発揚の場という性質から都市間の衝突の舞台となることにもなったということ。また、円形闘技場が利用可能であるのに、あえてアポロの祝祭日という宗教的文脈においてフォルムで剣闘士競技を行った事例から、その時期のポンペイにおいては剣闘士競技が本来の宗教的意味合いをまだ保持しており、娯楽としてのそれとは区別されていた可能性があったこと、である。さらに、剣闘士競技における中央と地方の関係について、論者はポンペイの事例から一つの実像を浮かび上がらせている。すなわち、開催告知における皇帝への言及の有無から、ネロ帝期、特に59年の騒動以降、剣闘士競技開催にあたって皇帝の存在を意識する必要性が生じたことである。この点は、見解が分かれていた先行研究それぞれの議論の不備をつくもので、地方の剣闘士競技と帝国政府の関係を分析する新たな視点を導入したと論者はその意義を強調する。

次に論者が分析したのは、現在の南仏プロヴァンス地方とラングドック地方にあたる地域の剣闘士競技と円形闘技場である。コロッセウムに次ぐ規模の二つの円形闘技場が非常によい状態で現存するこの地の事例を精査することによって、コロッセウム

中心的な見方とは異なる視点から、剣闘士競技・円形闘技場の社会的機能を意義付けることが可能となる、と論者はみる。ただ、史料状況などを勘案し、直接の分析対象は都市ネマウスに絞っている。論者はネマウスの剣闘士競技に関する史料をすべて射程におさめて考察し、この都市が持つコンテキストにおいて、円形闘技場と剣闘士競技が果たした社会的な機能を明らかにすることを目指した。

文学的な史料に言及されているところでは、前1世紀ごろまではネマウスの住民に他共同体出身者や商業従事者の数が比較的少なかったこと、その一方で後1世紀後半から2世紀にネマウスは属州内の最も裕福な都市の一つに数えられていたことが分かる。碑文史料をもとにした研究からは、後1世紀以降ネマウスには多くの「外人」が居住していたことが明らかにされており、この時期にネマウスの住民構成が変化していたことがうかがえる。円形闘技場が建設されたのはまさにその時期であった。コレギアとその共同墓地、そして剣闘士競技に特化した円形闘技場という点から、ネマウス都市当局が剣闘士と競技の開催に強く関与した可能性は高い。そして、剣闘士の出身地の分布がネマウスに特有な状況であったことから、剣闘士を集める際、何らかの意図が働いていた。その目的とは、ロダヌス川流域の都市を中心とした他共同体出身者・商業従事者の関心を引くことにあったと考えられる。以上のように考察した上で、論者は、ネマウスの円形闘技場に集まった観客が雑多であるがゆえに混乱を引き起こすことなく、むしろ同一の競技を観戦することによる一体感・連帯感を覚えたと考える。ネマウスにおける剣闘士競技・円形闘技場が有した社会的な機能とは、他共同体出身者を自らの都市に取り込み、一体感を涵養するための統合促進装置として働くことであったと見るのである。

さらに、論者はヒスパニアの事例を検討し、早い段階でローマ世界に組み込まれながらも、ローマの都市文化が地域全体へ簡単には浸透せず、先住部族の勢力も依然として色濃く残るという特徴を有したこの地域において、剣闘士競技がいかなる意味を持ったのかを考察した。史料の分布状況からバエティカでの剣闘士競技に焦点を当てた考察の結果、この地域での剣闘士競技はフラウィウス朝を画期として、皇帝・皇帝礼拝と深く結びついて運営されていたことを明らかにし、この結びつきが皇帝側からの強いステイト・コントロールに基づいたものであって、その背景にはヒスパニアの秩序を不安定にさせる潜在的要因であった内陸部の先住部族の動向を注視する狙いがあったと結論する。少なくともバエティカでの剣闘士競技は、秩序を安定させる道具としてその社会的機能を果たしていたと解釈している。

以上の事例研究とあわせて、予備作業的なものであるが、辺境地帯の剣闘士競技も考察している。一般に、辺境地帯の円形闘技場・剣闘士競技は、軍事施設に隣接する立地から、士気の維持・軍事訓練用との説明がなされている。このような用途を想定すること自体は蓋然性が高いと思われるが、あくまで立地のみに基づいた一般的な推測に過ぎない、と論者は考える。先行研究は、辺境地帯の剣闘士競技・円形闘技場が

さまざまな文化的背景を持つ軍団兵にローマの文化を浸透させ、そこに同化させること、さらに剣闘士競技を通じてローマへの反抗がいかなる結果をもたらすかということ、軍団兵のみならず近隣の地元住民に対して視覚化させる機能があったという。しかし、そのような機能を単純に想定することが難しいケースがあると論者は指摘する。そして、民間人居住地と要塞それぞれに円形闘技場が建設されていたカルヌントゥムとアクィンクムを分析している。これらのケースの意味を考察するにはさらなる分析が必要としながらも、辺境地帯においても円形闘技場の持つ機能は多面的であったことは間違いないと論者はまとめている。

剣闘士競技・円形闘技場全体をめぐる従来の研究では、剣闘士競技において示されるローマの伝統的なウィルトゥス（美德、勇敢さ）を観衆に再認識させる機能のみならず、コロッセウムに代表される階層ごとの座席指定が、皇帝を頂点としたローマ社会の階層秩序を可視化させる機能をもっていたと強調してきた。コロッセウムは社会階層の上下をもとにした秩序形成という社会的機能を担ったというわけである。この結論をローマ社会全体に敷衍して、剣闘士競技・円形闘技場の社会的機能は理解されてきた。しかし、本論文第Ⅱ部での議論は、剣闘士競技・円形闘技場が非常に多面的な姿を見せていたことを論者は明らかにした。先行研究でも指摘されているとおり、競技を観ている側にある種の一体感を醸成したということはまず疑いえないだろうが、その一体感が誰のイニシアティブで、どのような人々に対して、どのような紐帯をもとに醸成されたのかという点が重要であると論者はいう。各地域の事例を精査した論者は、剣闘士競技がそれぞれの地域の事情に応じてさまざまに応用が可能であったことを明示している。一体感の醸成という共通する機能を核としながらも、それを取り囲む条件は可変性に富んでいて、この性質こそが剣闘士競技をローマ社会の結節点として非常に有効に機能させえた理由なのであると強調している。

論文の最後において、論者はコレギア、剣闘士競技と円形闘技場がいずれも紐帯として機能し始めるのは社会秩序の安定化が求められた1世紀末から2世紀初めであったと推考している。そして、それらの機能の限界がローマ社会の変容とともに現実のものとして露呈し始めたときに、異なる結合原理が社会に浸透する契機が生じ、その異なる結合原理を担ったのがキリスト教であったと展望している。

(論文審査の結果の要旨)

ローマ人は、古代の地中海周辺地域を中心に大国家を樹立し、長きにわたってこれを統治したが、本論文は、このローマ帝国について、最盛期の帝国西部の都市社会における社会的結合関係を解明することを通じて、帝国社会の特質を明らかにすることを目指したものである。ローマ人の社会の性格や特徴を究明する作業は、帝国形成や繁栄の秘密を解き明かすためにきわめて重要な課題であるが、政治や軍事、法制度や宗教などの研究に比べて社会の実態解明は遅れていた。19世紀の末から文学作品を主たる史料としつつ日常生活を調査、復元する研究は始まっていたが、1960年代以降に「社会史」の影響を受けて家族や娯楽などの新しい領域の研究が進み、分析する材料も、文学作品から考古資料やローマ人が石板に刻んで残した碑銘などの金石文史料に重心が移った。本論文は、こうした研究史を踏まえながら問題の解明に努めた労作である。

論者の研究は、一般のローマ社会史研究とは異なり、西洋近世史研究などで成果を上げているソシアビリテ論やマンタリテ(心性)に関する議論から刺激を受けて、ローマ社会で人々が集い結びつくあり方や人々の心のありようを解明しようとする独自の視角をもつ。そして、具体的な研究対象として、本論文Ⅰ部ではおおむね同程度の社会階層内で結ばれる関係を知るためにコレギアを、第Ⅱ部では異なる社会階層間で結ばれる関係を知るために、見世物、とくに剣闘士競技を取り上げる。コレギアは自発的に形成される組合やクラブのような存在で、同程度の社会階層に属する人々が集っていた。一方、剣闘士競技は皇帝から支配者層、一般民衆、そして奴隷まですべてが円形闘技場という一つの場に集う機会であった。これらに関する情報は文学作品などには散在しており、論者が新たな知見を得るために分析したのは、墓碑銘や顕彰碑文などのラテン語金石文史料である。

本論文によって得られた成果のうち、次の2点が特に重要である。第1に、コレギアの活動の中でも葬送活動の分析を通じてコレギアの構成員を解明し、コレギアの果たした重要な役割を示したことがあげられる。葬送活動に関わるコレギアの構成員には東方出身の移住者や解放奴隷などが大きな割合を占め、家族・親族関係を有さない人々がコレギアにおいて擬制的な家族関係を取り結んでいたことが明らかにされた。「葬儀組合」という類型が可能かどうかの議論に拘泥していた先行研究の難点を克服し、社会におけるコレギアの意義を提示したところに本論文の大きな意義がある。第2に、剣闘士競技に関する従来の研究がローマ市中心、コロッセウム中心に分析した知見を、属州を含む帝国社会全体に敷衍して議論していた点を批判して、イタリアや属州の都市に密着して検討したことがあげられる。従来の研究では、剣闘士競技がローマの伝統的なウィルトゥス(美德、勇敢さ)を観衆に再認識させるのみならず、円形闘技場の階層ごとの座席指定が皇帝を頂点としたローマ社会の階層秩序を可視化させる機能をもっていたと強調してきた。コロッセウムは階層の上下をもとにした秩序形成とい

う社会的機能を担ったというわけである。しかし、論者は、イタリアの都市、ポンペイをはじめ、南フランスのネマウス、イベリア半島のコルドバ、ドナウ辺境のカルヌントゥムとアクインクムに関して墓碑銘などの史料を分析し、これらのケースで剣闘士競技と円形闘技場が果たしていた役割が、コロッセウムについて論じられていたものとは異なることを明確にした。ポンペイでは剣闘士競技会の開催が娯楽だけでなく宗教的な意味合いを保持していたこと、ネマウスでは、他の共同体出身者を自らの都市に取り込み、一体感を涵養するための統合装置として働いたことなどを論者は明らかにする。そして、剣闘士競技はそれぞれの地域の事情に応じてさまざまに応用が可能で、一体感の醸成という共通する機能を核としながらも、それを取り囲む条件は可変性に富んでおり、この性質こそが剣闘士競技をローマ社会の結節点として有効に機能させた理由なのである、と論者は結論している。学界の認識を改める貴重な指摘である。

論者の研究の手法は、ラテン語碑文を網羅的に収集して分析した点に特徴があり、文学作品からの情報が限られているために根拠不十分なまま語られがちであったローマ人の日常生活や社会関係に、十分な史料調査を踏まえた上での説明を与えた。この点に本論文の高い価値がある。個々の論点で先行研究を批判して達成された成果は国際的にも独創性を主張できるが、とくにわが国では剣闘士競技についてしばしば話題になることはあっても学界で社会史の本格的な研究として論じられたことがないので、この点でも大きな貢献といってよい。ただし、ラテン語碑文の分析の精緻さに比して、分析結果をもとにコレギアや剣闘士競技会の社会的機能をまとめ上げる議論はやや粗く推測が目立ち、より立ち入った考証や史料が少ない点を克服するさらなる工夫が望まれる。また、属州の事例を扱う研究には、論者の努力は認めるものの、考古学的研究の摂取や現地での実地調査で進展する可能性も大きく、今後の論者の研究活動の拡大に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年1月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。